

## 第4回 釧路川流域委員会 議事概要 (案)

日時 : 平成 15 年 7 月 29 日(火) 14:50 ~ 16:50  
場所 : 北海道標茶高等学校 多目的教室  
出席者 : 内島邦秀委員、小磯修二委員長、佐竹直子委員、杉沢拓男委員、高山末吉委員、辻井達一委員、濱隆司委員、伊東良孝委員、今西猛委員、徳永哲雄委員、錠者和三郎委員(代理 田中建設課長)  
(以上 委員 11 名)

### 議事概要

#### 1. 開会

変更のあった委員(一條昌幸 新委員、門田功一 新委員、今西猛 新委員)について紹介。

#### 2. 委員長挨拶

- ・ 釧路川流域委員会で河川整備計画を検討するにあたっては、釧路川のランドデザインを持って議論をすべきであるという意見が第1回の流域委員会で出されていた。
- ・ 河川整備計画の期間としては20年から30年であるので、ランドデザインという指針作りとしては50年から100年の長期のものとなる。
- ・ ランドデザインは計画づくりではなく、こうあるべきという川づくりの指針を示すものであり、今回ランドデザインの考え方のたたき台を踏まえて、自由な意見交換をしたい。

#### 3. 議事内容

##### 1) 釧路川流域の整備方針(ランドデザイン)について

事務局から資料に基づき、釧路川流域の整備方針(ランドデザイン)について説明があり、次のとおり発言があった。

(委員長)

今日の議論として、一つ目は、説明資料についての質問や意見、現地調査での感想および現状についての再認識も含めた議論をしたい。二つ目は、今後に向けてのランドデザインの検討作業につながる各委員の考えをいただく形で議論を進めていきたい。

(委員)

下流から上流まで現地を見て、下流では堤防もでき、以前に比べると非常に心が和むような雰囲気を感じた。上流の弟子屈町では3面張り護岸のような構造であるが、当時、治水上あのような工法しかなかったと思う。もう少し水に親しみやすいような構造にするには、上流側に抜本的な対策を行わない限り、治水上、安全性が保てないと思う。

地域の方がもう少し関心を持って、本日の流域委員会等の場に積極的に参加してもら

いたい。

(委員)

先日、依頼を受けて川の通信簿という調査活動に参加したが、そのとき、川を使っている人がとても少なく、一般住民に釧路川は親しまれていないというのを実感した。パークゴルフをしている人はいたが、その人はどこのパークゴルフ場でもいいわけで、実際声をかけても釧路川についてはわからないと答える人がほとんどであった。例えばイベント等の企画は、会場として使っていることはあっても、本当に川と親しむとか、親水性を主に企画されたものというのは、ほとんどないような気がするので、親水という意味で、もう少しいろんな仕掛けや工夫が必要だと思った。また、カヌーポートや公園等の色々な親水施設を整備しても、ソフトの面の使い方がなければ、使われないと思うので、住民参加やソフト面の充実が大切だと感じた。

茅沼の蛇行を復元するところの直線河道は、あのままだでも景観的には結構きれいで、このまま埋めるのは勿体無いと感じた。

(委員)

川というのは流域管理として、集水域全体の管理から考えなければいけないと思う。河床低下の原因は、直線化することにより流れが速くなったことによるのか確認をしたい。釧路川の直線化した部分について、なぜまた無理やり曲げなければいけないのか疑問である。蛇行そのものは良いことだと思うが、あの川幅は非常に広く、既に川の中で蛇行しているので、自然の流れの中で蛇行を作っていくことはできないのか。また、岩保木水門は造る必要がなかったのではないかという感じがするとともに、横堤は未完成でありあまり必要がないような気がする、実際に機能しているのか確認をしたい。

(事務局)

釧路川の中流部から上流部にかけて河床低下が進んできている区間は、これまで洪水対策等の目的で直線化して、両側には堤防で守るといったような方法で整備してきた。直線化することによって洪水を安全に海まで流してきたが、洪水時の川の流れは速くなるので、それも河床低下の1つの引き金になっているかもしれないと考えられる。技術的な話になるが、原因としては、通常、土砂は溜まる分と流れて出る分がバランスして河床が保たれていることが多いが、上流から土砂の供給が止まると下がる場合がある。また、勾配が急になって流速が速くなると、砂などの粒を持っていく掃流力という力が大きくなり、土砂が減ったという見方ができるが、それが原因の全てかどうかは分からない状況である。

横堤は、水をダムアップして、遊水ボリュームを増加させるものであるが、今のところ、そこまで水が上がったという話は聞いてないので、その意味では効果を発揮していないと思う。

(委員)

横堤にサケの捕獲場があるが、湿原が遊水地化してオーバーフローをして、サケが上上がったことがあるので、遊水地は既に機能していると考えた方がいいかと思う。

(委員)

これから釧路川を中心にしてランドデザインを発展させていく場合に、上流からの土砂流出による湿原の森林化等の問題が生じているので、釧路川の周りの支流も含めて、どのようにしてできたかという地形的なことをしっかり押さえておくとともに、各流域自治体がどのような対処をするのかも把握しておく必要がある。

弟子屈の鑑別川合流点の近くで、流れが急となって河床が下がっているのが気になった。川はなるべく自然のままにしておきたいが、河床低下が色々なところや構造物にも影響を及ぼしていくと思うので、人間が手を入れなければならないものは、きちんと手を入れることも必要と思う。

(委員)

釧路川が見られる場所等の情報を含めた川の地図があっても良いのではないだろうか。例えば、釧路川のどこから行けばどう接近できるかという情報だけでなく、川の方から見た地形やカヌールートなどの情報が含まれた地図を、カヌーや釣りをする人たちに作ってもらうことも考えられる。おもしろい地図ができると、実際に行ってみて、みんなが情報を加えたり修正したりするようになり、その結果川への接近が大きくなっていくのではないのか。

(委員)

上流部の森林の保護や不在地主の山林を買い取って植樹することにより、初めて川がきれいになり、海がきれいになると思う。釧路川の上流部の開発は、細心の注意を払って行ってほしいと思う。下流部については横堤や岩保木水門などの治水対策が既に完成しており、河口や港の形は魚の遡上しやすいように議論をしながら作ってきた。市民とすれば、川辺に親しみたいという希望はあると思うが、ヨシが生えた、むしろ危険であるという形が全体的には望ましいと思う。釧路川の河畔全体を親水できるようにするのは無理があるので、ここは何するところという全体計画を作って、自然のままの川やきれいなままの水を残しておいてほしいと思う。

(委員)

釧路の水道水の原水は、達古武湖の下流から取水しているので、達古武湖のほとりで畜産業者が糞尿を垂れ流すと非常に困る。また、上流部の酪農家、畑作農家そして工場等から生活雑排水も含めて釧路川に流されるのは、下流に影響があるので、自然環境の保護や一定の規制が必要である。きれいな水が取水できて、魚の住める環境を保持するようにしてほしい。また、上流に魚道を整備して魚が自然に産卵床まで行けるようにし

てもらいたい。

カヌーについては自然の雰囲気の中で楽しむ程度で十分で、カヌーのPRのし過ぎと集まり過ぎはよくないと思う。また、広域農道の湿原大橋の開通により湿原及び釧路川への接近が容易になることを心配している。

混交林の森林整備によって河川がきれいになるという意見に同感で、今の環境をどう保全していくのかということに心を砕くべきであろうと思う。

(委員)

川を守ることは緑豊かな山づくりをすることだと思うので、中流部の町としてそのような形で対応していきたい。

目下の緊急課題となっている家畜糞尿処理法による施設整備の期限が来年の10月であるが、本町ではその時点で酪農家385戸のうち4割の整備が残るのではないかと懸念しているが、中流部に位置する町として、できる限りきちっと対応していきたいと考えている。

(委員)

昔、釧路川は蛇行したりゆったりとした流れでイトウも棲んでいたが、直線化されて流れが速くなっていると感じた。また、弟子屈町で水に親しむためには、今後の工夫が必要であると感じた。

川の縁に木が少ないので、片側くらいは除草等の管理をせずに木を自生させたり、ニレ等の大木があってもいいと感じた。落差工が自然に埋まって魚が遡上できようになった箇所もあるが、落差が2mもあるところでは落差が埋まらずに魚等の生物のいない川になっているので、釧路川の上流部という位置づけを明確にする必要があると感じた。

人間が手を加えても、100年に1回の災害がくると、立派な護岸でも流されることがあると思う。環境との共生の時代であるので、自然の状態になるような優しい思いで護岸を造ったり、治水対策をきちっとした方がいいと感じた。

(委員代理)

雪裡川など鶴居から流れている川は、釧路市の水道取水口よりも下の方で合流しているが、酪農の糞尿施設については平成16年度で鶴居村の大部分の農家の施設が完成すると考えており、湿原に流れる悪いものはかなり減ると考えている。

(委員長)

次にランドデザインに向けての議論を行うが、地域資源評価図は貴重な資料と思うので、地域資源評価資料のデータおよび分析方法を示すとともに、現在のこの地域の利用実態と比較してどのような乖離や問題があるのかというアプローチも示してほしい。それが意味での長期的なビジョンであり、ランドデザインに結びつく大事な議論の進め方であると思う。

前の委員会で、ランドデザインを議論するにあたっては地域住民の意見を受け止めることが重要との意見があったが、先週、グループインタビューというマーケティングリサーチの方法を用いて、流域住民の代表から釧路川とのかかわり、川の役割、環境問題等について意見を聞いた。その中で意見としては、川と触れ合う機会は意外にないが、反面そういう場が比較的増えてきており、子供を連れて行くと喜ぶ等、川に対する潜在的な生活の中での触れ合いの場という期待は非常に大きかった。また、下流部では、水のきれいさに対する関心が大きい。

大きな問題として、上流と下流部に暮らしている方々との意識は実態としてかみ合っており、それを超えるような管理システムのようなものが必要であるなどという意見があった。将来のランドデザインにむけて、釧路川流域をトータルで管理していくようなメリハリのきいた政策展開が、将来ビジョンづくりの中で合わせて議論していかなければ、具体性のあるものになっていかないと感じた。

川を考える場合に、単に治水だけではなく、命のある生態系のある川という両面を見つめて川のあり方を議論してほしいという意見や、立場の違う人たちがそれぞれに考えていけるような釧路川であるべきという意見や、釧路川は癒しであるといった、治水、利水、環境を超えた、新しい河川の役割のような意見もあった。

釧路川らしさ、独自性ということでは、原始の姿をとどめている釧路川は地域の財産であり、また、外から来る人や地域の大事な産業である観光にとって魅力のある釧路川でありたいという意見があった。ランドデザインには、このような声を活かしながら議論を進めていきたい。

(委員)

資源評価図は重要な材料になると思うので、資源評価図の評価をする必要がある。各町村や委員が検討を行い、不足していないか、または適正な評価かどうかを考えなければならない。たとえば、屈斜路湖周辺、摩周湖周辺、硫黄山、釧路町の昆布森海岸や尻羽岬の評価が低いのではないかな。

各種関連計画の整理図に、具体的な流域町村の考えている情報が含まれると、考えやすい図ができると思う。

データの補完について、例えばシシャモの漁獲量はまとめてあるが、産卵床の情報は含まれていない。漁獲量が大きいうことが重要ではなくて、産卵床があるのかないのかということの方が重要であるので、そのような情報を含めるようにしていかなければならないと思う。つまり評価図をどう読むかということが、非常に重要だと思う。

(委員長)

資源評価図はどのようなデータ分析によって、エリア分けが出てきたのかというプロセスが見えないと、意見の出しようがないので、使用データと分析手法をわかるようにして欲しい。

(事務局)

流域の中の地質、地形、地下水、表流水、土壌、植物等の基礎的なデータを分類して、例えば環境資源評価図なら、栄養塩の流出のしやすい地形などの観点から色分けをしていて評価図を作成した。

(委員長)

いつの時点のどのようなデータを使用したのかが明確になれば、その地域に対して発展的な議論につなげていくような形になると思う。各種関連計画で、ランドデザイン、あるいは河川整備計画 20 年、30 年について、それぞれの流域内の行政として、将来に向けてどういう方向で考えているのかを整理するのが大事であり、流域全体でそれを眺めて議論する段階が一つ必要と思う。

データの管理については、河川情報の全体の管理と、その情報公開という取り組みが必要であると思うが、データの管理と公表方法は、これから大事な分野であると感じている。

(委員)

データを出すことは大事であるが、それによって上流側と下流側の各自治体はある意味で利害関係者になってしまう可能性がある。流域の各町村がお互いに支援や応援をするような連携の体制があって初めて話が進んでいくのではないかと思う。お互いに言い分はあるかもしれないが、解決できるような方向に持っていけないと議論がかみ合わないまま、きれい事で終わってしまうということになりやすい。

(委員)

地域資源評価図に基づいて、具体化を図って進めていってほしい。流域管理を考えた場合に、どこの地域からも土砂が流出しやすい地域があるということがこの資源評価で明らかになっているので、ランドデザインの中に、具体的な土砂対策を示すようなデザインも描いてほしい。

上流では家畜糞尿の問題で悩み、下流でもその影響を受けているのは現実であるが、上流の森が涵養して水があり、その恩恵を下流が受けている。上流の責任だけを問うのではなく、下流もどのような支援ができるのかを考える必要がある。

(委員)

上流、下流域、漁業、農業、親水性といった、異なる分野の違う地域の方たちの意見を、どうトータル的にランドデザインにつなげていくかというのが、これからの委員会の役割であると実感した。グループインタビューの方の結果なども興味を持って次回伺いたい。

(委員)

この評価図は流域の区分にも役立つと考えていいのか。非常にゾーニングが難しくな

りそうな気がする。

(委員長)

この流域委員会のランドデザインの意味は、あえてゾーニングをしないで、全体で見えていくという考え方があるのではないかと考えている。

(委員)

ゾーニングは考えていないが、土地利用図や資源評価図から何が読めるか、何を読み取るかということが重要だと思う。

## 2) 第3回「釧路川流域委員会」での意見に対する検討方針

事務局から資料に基づき、第3回「釧路川流域委員会」での意見に対する検討方針について説明があり、特に委員から発言はなかった。

## 3) 第2回釧路川下流域部会の報告

事務局から資料に基づき、第2回釧路川下流域部会の報告について説明があり、特に委員から発言はなかった。

## 4) 今後に向けて

(委員長)

次回委員会までに、ランドデザインそのものについて少し集約できるような方向性の検討を事務局と相談しながら、委員長の判断を進めることを了解いただき、関係の委員には、個別に相談の機会を設けながら進めていきたい。

## 4. その他

特になし。

## 5. 閉会